$\frac{1}{2}$

永遠の$\frac{1}{2}$

佐藤正午

集英社

永遠の1/2

一九八四年一月一〇日　第一刷発行
一九八四年三月三一日　第六刷発行

定価　九八〇円

著者　佐藤正午

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©1984 S.SATŌ, Printed in Japan
ISBN4―08―772462―X　C0093　¥980E

目次

第一章　その前の年　5

第二章　にぎやかな一年　9

一月　9　二月　32　三月　56
四月　62　五月　96　六月　145
七月　148　八月　186　九月　228
十月　232　十一月　301　十二月　323

第三章　そのあくる年　374

装画　ネモトヤスオ
装丁　亀海昌次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

永遠の$\frac{1}{2}$

第一章　その前の年

十二月

失業したとたんにツキがまわってきた。

というのは、あるいは正確な言い方ではないかもしれぬが、それはそれでかまわない。第一、なにも正確に物語ることがぼくの目的ではないし、第二、たぶんこちらの方が重要なのだが、ぼくは並み外れて縁起をかつぐ人間である。これはたとえば、机の上の鉛筆がひとりでに転がって床に落ちたとして、そのとき机の傾斜を調べるより先に鉛筆の芯が折れたことの方を重く見る。重く見たがる。そんな性格なのだ。だから、一年の終りに会社を辞めて翌年の頭からつきはじめたことをいま思い返すと、何かちょっと因縁めいた文句でもつぶやきたくなる。まるで職を失った瞬間に背中で幸運が微笑んでいたかのように。まるで職を失うことと幸運との間に因果関係でもあったみたいに。もう一度つぶやこう。

失業したとたんにツキがまわってきた。

年の暮れに退職届を出してそのあくる日、街のハンバーガー屋で婚約者と会ったのだが、彼女はコ

ーヒーをひとくち飲んだだけで気分が悪いと言って帰ってしまった。大晦日の朝になって速達が届き、横書でピンクの便箋三枚にわたって（開くのにひどく骨が折れる畳み方だった）、要するに結婚の話は御破算にしたいと書いてある。二へん読み返して納得がいった。ただ、やはり手紙だけでは心もとないので確認の電話をいれてみた。なにしろ一月前にはふたりして長男の名前まで考え合った間柄なんだし。呼び出し音が一つ鳴り終らぬうちに彼女が出たのはいいが、どうも要領を得ない。

――わかってると思うけど、この先ずっと働かないわけじゃないんだ。いい仕事がすぐに見つかるかもしれないし、それに（咳払い）、貯金もいくらかはある。

そんなことまで言ってみたのだが、相手は生返事しかよこさなかった。どうやら一月前のぼくに倣ったらしい。お手あげ。行きつけのコーヒー店で一時間待つと宣言して受話器をたたきつけた。二時間待った。

それ以来、彼女からは何の音沙汰もない。いま思えば不思議な気さえするけれど、ぼくは、一年近く続いた女との関係をたったの二時間で清算できたことになる。しかも結婚はしない、殺人も犯さない、涙の一滴だって女の目からはこぼれないというのだから、これは離れ業だ。と、そんなふうに、じつは以前からぼくは考えていて、この一件までがどうやらツキのなかに繰り込めそうな気がする。

ところが、高校時代からの友人で伊藤公という男は、この話を聞いたとき、即座に、駄目だと言った。ふられた男の負け惜しみと決めつけたのである。

「しかし一年つづいたということは」とぼくは考え考え反論した。「少なくとも五十回は寝た勘定になる。それは判るな？」

「わかるさ。すくなくとも五十回のファックだろが」

母校で現代国語と古典と漢文を教えている男はそう答えた。

「じゃあ訊くけど、五十回もファックした女とそのうえ結婚したいと思うか？」

「おれは思わない」
「だれが思うんだ」
「そりゃすくなくとも五十回のファックを……ちょっと待て、するとおまえは一晩に一回しかやらなかったんだな？」
「いや、二回のときも……」
「三回は」
「それはちょっと」
「無理か。でもそうすると五十回じゃきかないな。すくなくとも八十回くらいにはなる」
「無理なもんか、おれはただ……八十回ならなおさらだろ？」
「三十回までならどうだ？」
「それなら、まあ、考えても……」
「三十回で手を打つ男が五十回だと二の足を踏むのか」
「二十回の差は大きいからな」
「ほんの三ケ月の違いじゃないか」
「百日。つき合ってみろ、長いぞ。永遠の半分だ」
「結婚してみろ、短くなるさ。永遠のひとしずくくらいには」
……むろん二人とも酔っていたのである。呑んだくれの議論はこのあとも延々と続き、明け方にはホワイト・ホースの瓶が二本空になった。もっとも、これは翌年の三月の話なので、その頃、伊藤はちょうど結婚が決っていて、そうでなくても女に関してはぼくより五年先を行ってるとかねてから自負していたし、ぼくはぼくで自分のツキにかなりの自信を持っている。傍(はた)から見れば愚にもつかぬ話題が、酒のさかなになり得たのは、たぶんそんな時期のせいもあった。それに、結婚前に許されるフ

アックの回数はいくつか、というのは素面(しらふ)で考えたって難問には違いない。二人の酔っぱらいが、相手の意見のどの辺で譲歩すべきか見当がつかなかったとしても無理はないだろう。

いずれにしても、いまここで肝心なのは親友の意見に耳を傾けることではない。くどいようだがぼくの性格を頭においてもらうことである。すなわち、ぼくはこう言いたくてうずうずしている。この年の大晦日、三ケ日まで休ませて頂きますという貼紙のある店の前に立って、鼻水をすすりつつ来ない女を待っていたあたりから、すでに幸運はぼくのかたわらに寄り添っていたと。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

第二章　にぎやかな一年

一月

娼婦を買った夜のことから話ははじまる。商売女と寝るのが男のツキのうちに入るかどうか意見の分かれるところだろうが、ぼくとしてはツキの兆しを認めたい。二十代の街娼なのである。ホテル代と別におよそ革靴二足分の出費はたしかに痛かったけれど、その年齢のその種の女がそう何人もいるとは思えない。やはり彼女に当ったのはぼくがツキかけていた証拠だろう。

正月の三日だった。その夜、中華料理店での高校の同窓会からカラオケ・バーの二次会へ流れ、そのあとやっと解放された伊藤とぼくは、いつものように市役所の裏に出ている屋台に寄って帰ることになった。同窓会の幹事である伊藤はコップの水をうまそうに飲みながら、毎年出席している女たちに対する不満を述べ、

「年々、酒は強くなるし、顔は一様になるんだ。化粧のせいかな、笑顔なんか見分けがつかないくらいで……おまえ、気がつかないか？」

卒業以来、九年目にして初めて出席した男の変化に驚いてみせた。

「あいつがあんな猥談のできる男だとはな」
幹事補佐および会計係のぼくは、ときどき出席するが今回は顔を見せなかったかつてのクラスメイトを数えながらラーメンをすする。そしてこの屋台のスープの味付はあいかわらず濃すぎた。ふたりとも水をお代りしてから、大通りへ出たがタクシーはなかなか来ない。料理の品数が思ったより少なかったんじゃないか、いやあんなもんだろうとか、ブレイザーはいったい岡田にどこを守らせるつもりかな、やっぱりジャイアンツに欲しかったよ、長嶋は来年の原を待ってるんだろうなどという話をしてるうちにやっと一台やってきた。いつものように伊藤が先に乗って帰り、ぼくはひとりになる。ハイライトを一本喫ったが空車は通らない。しようがないからアパートの方角へ二三歩、動きかけたときに車が寄って来て止った。助手席の窓が下に辷って女が顔を出し、
「乗らない？」
と、誘う。手まねきをする。そばへ行ってみた。すると囁くような声で、遊ばない？　と訊く。髪の毛を短く、もし化粧をしなければ顎の線の柔かさでかろうじて性別をたもてるほどに短くした女だった。ディスコに誘われてるのではないことくらいぼくにもわかる。車の中を覗いてみた。女ひとりだった。ぼくより三つは若い。ぼくは唾を呑みこんで、
「つまり……」
「そうよ。はやく乗って」
「驚いたな」
とぼくは車に乗り込むと馬鹿なことを口走った。
「正月の三日だぜ」
「かせぎどきよ」
ドライブの途中でビジネスライクに（と女が言った）打ち合せを済ませて、そのままモーテルへ行

った。そのあとのことはとりたてて言うこともないけれど、一つだけ、こんなやりとりがあった。終ってから、シャワーを浴びて身仕度をしているときに、女がふっと思い出したように言ったのだ。
「ねえ……初めてだった？」
あまりのことに煙草をくわえたまま言葉を捜しあぐねていると、
「あら。違うのよ」
と敏感な娼婦はいかにもおかしそうに笑って、
「あのね（まだ笑ってる）、あたしと初めてだったかって訊いてるの」
ぼくは深い吐息をついて、床に落ちていた腕時計を拾い上げた。
「もちろん、初めてだよ」
「そう……」
とこんどは笑わずにぼくの顔を視つめて、
「でも、おたくの顔は初めて見たような気がしないんだけど」
「わかるよ。あなたの笑顔を見てると他人のような気がしないってよく言われる。でも他人のままでいましょうねって……」
ぼくが意図したほどその場の雰囲気はなごまなかった。相手はにこりともしないで、口のなかで舌を右に、左にゆっくり動かすと、
「兄弟は？」と訊ねる。
「妹が一人。でもぜんぜん似てない。妹は父親似でぼくは母親似」
「でしょうね」
「それ、どういう意味だろう」
どういう意味か女は教えてくれない。急に疲れたような表情になって押し黙った。ぼくはダブル・

ベッドの端に腰かけ、乗り換え駅で列車を待つみたいに煙草に火をつけた。女が教えたくない事は聞いてもおもしろくないに決ってる。しばらくして女は言った。
「もういいわ。気にしないで」
ぼくはうなずいた。ちっとも気にしなかった。といってもべつに売春婦の指示に素直に従ったわけではなく、他のことにこだわっていたからである。そしてそのせいで、この気だてのやさしい女が、別れ際に心配性の男の気持を察したのか、
「おたく、もっと自信を持ったら」
と微笑みながら助言してくれたときに、
「今夜はだいぶ酒がはいってたからな」
などと余計な弁解をして、ふたたび声をたてて笑われるはめになったのだ。
「そうでもなかったじゃない」
となぐさめるように、あるいはからかうように女は言い添えた。ぼくは最後に頼んでみた。「もういっぺん会えないかな」
すると娼婦が答えた。
「縁があったらね」

*

十三日、日曜。東京は朝から雪だとＮＨＫの正午のニュースが伝えていたが、西海(さいかい)市は快晴である。テレビの深夜映画で『ヤング・フランケンシュタイン』の放送がなかったらもっと早起きもできたのだが。競輪場に着くとちょうど第四レースが終ったところだった。

一度でも競輪に賭けた経験のあるかたなら、他人の予想を聴くのがどれほど興味深いか、そして他人の予想が当ってどれだけ儲けたという話を聞くのがいかに退屈でいまいましいか御存知だろう。できるだけあっさり済ませるが、十三日は第五レースから第十レースまですべて予想が的中し、約三時間のうちに三枚の一万円札が十五枚に増えた。翌朝は九時に起き出して、十一時四十分に第一レースが始まる頃には、暖房のきいた特別観覧席でコーヒーを飲んでいた。この日は十レースのうち七つまで的中。明けて十五日、八時五十分起床（つまり目覚しが鳴る十分前）。十レース中、二つしかはずさなかった。後節は十九日の土曜から三日間の開催だった。正確に言うと、開設二十九周年記念西海競輪〈オールA級〉第二節、となる。初日は縁起をかついだ。NHKのニュースを見てから、三万円だけ持って出かけたのである。

五百円で買った予想紙と五十円の西日本スポーツとのレース解説を見比べながら、売上げ枚数を示すテレビ・モニターをながめていると、誰かに肩を小突かれた。あわてて振り向いたけれど、いきなりでどう挨拶してよいかわからない。困っているところへ、

「やあ、こんどは本物だ」

とのんびりした声で父が言う。この挨拶の意味もよくわからない。しかし訊ねれば話が長くなるので、

「元気そうですね」

とだけ答えておいた。

「ああ。おまえも」

それっきり父は黙る。ぼくの方から喋ることは何もない。第五レースの発売締切りまであと十分だと、女の声の場内アナウンスが告げた。ほとんど同時にモニターの数字が愛想もなくかき消える。人だかりが唸りながら動きはじめる。父が訊いた。

「ふたりとも元気か？」
ぼくは「ふたり」が母と妹を指していることに気がつかぬというふうに父を見返し、それから父の手に引かれている四歳の男の子へ眼を移した。阪神タイガースの帽子を被っている。きっとまだ野球を知らないんだろう。
「ええ」とぼくは答えた。「元気ですよみんな」
そしてそのままさりげなく歩きかけるのを、
「おい」
と父がジャンパーの裾をつかんで、
「さっき人違いしてな。世の中には似た男がいるもんだ。こう、ちょっと見たところ、おまえにそっくりだった」
「ああ……」
と思わずぼくがうなずいたのは、「こんどは本物だ」という父の台詞がやっと呑みこめたからである。が、父はどう思ったのか、
「なんだ知ってるのか？」
「いや。どこで見たんです？」
とそれほど興味もなく訊ねてみると、
「なに、入場券を買ってて、ひょいと横を見たらおまえがいた。と思ったんだがな」
「へえ」
これは我ながら気の入らぬ相槌だった。それをごまかすためもあって漠然と正面入口の方向へ眼をやった。父が咳払いをひとつした。昔からの癖だ。それから独言をつぶやく。
「このレースは3の頭で堅いな」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo